

おひとりさま事例集（8） ～軍艦マーチでお墓へ～

おひとりさま事例集に戻ります。今回の主人公は、お亡くなりになった山本幸三さん（享年96）です。

OAG ライフサポートでは先日、幸三さんと、1年半前に先に旅立たれた妻の美也子さん（享年97）のご夫婦のご遺骨を、都内の室内納骨堂におさめさせていただきました。



幸三さんの納骨に際してのご希望は、3つありました。

1つは、幸三さんが亡くなるまで先に亡くなった妻の美也子さんのご遺骨はお部屋に置いておくので、幸三さんが亡くなったときに夫婦そろって納骨してほしいということ。2つめは、屋外の墓石は大地震で壊れてしまうかもしれないから、耐震のしっかりした室内の納骨堂を選んでほしいということ、最後の1つは、納骨のときにBGMとして「軍艦マーチ」を大音量で流してほしいということでした。

1つめと2つめは、同時に考えなければなりません。ご夫婦ふたりで一緒にというご希望ですから、誰もかれも一緒にという合祀・合葬の納骨堂にはじめから納骨してしまうのではなく、7年間は骨壺のまま夫婦ふたりだけの区切られた空間にいられるような納骨堂をご存命中に選んでいただきました。その後は、承継者がいないので合祀されることもご納得いただきました。

3つめについては、ご存命中に音源（正確に言うと音声付きの動画）をご一緒に用意しました。美也さんが亡くなった後、美也さんの姿が映し出された動画を作成し、軍艦マーチの他にも幸三さんと美也さんが好きだった昭和歌謡を選んで音声としました。

なぜ納骨という場で「軍艦マーチ」を希望されたのでしょうか？

幸三さんは、海軍兵学校出身だということを生涯誇りにしており、「軍艦マーチ」は彼のアイデンティティそのものでした。別に戦争を肯定する意図など何もなく、この時代に青年期を懸命に生きた方々にとっては、「軍艦マーチ」も「同期の桜」「露営の歌」「出征兵士を送る歌」などの軍歌も、ただただ青春を彩るBGMに過ぎないのです。私が青春時代を思い出すときに、自然に「ドリカム」の歌が脳内BGMで流れるのと同じことです。

こうしたことを、幸三さんはまだお元気なうちにすべて準備をしておきましたから、1年半前に美也さんが亡くなり、そして幸三さんご自身も96歳の生涯をまっとうされた後、死後の事務を受託していたOAG ライフサポートでは、何の滞りもなく幸三さんご夫婦のご希望を叶えることが出来ました。

ちなみに、幸三さんはたいそう気難しい方で、複数いらした兄弟姉妹やその子供たちとは10年以上前から絶縁状態にあり、ご自身が亡くなったこともOAGからは一切知らせないでほしいという強い希望もお持ちでしたので、葬儀・納骨はすべてOAG ライフサポートが喪主としてつとめさせていただきました。